



Title	苗族史の近代：漢族西來說と多民族史観
Author(s)	吉開, 将人
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 124, 25(右)-55(右)
Issue Date	2008-02-15
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/32427
Type	bulletin (article)
File Information	YOSHIKAI.pdf



[Instructions for use](#)

苗族史の近代

—— 漢族西來說と多民族史観 ——

吉
開
将
人

苗族史の近代

——漢族西來說と多民族史観——

吉
開
将
人

《目次》

はじめに

一、苗族先住説の論理——漢族西來說との相関

二、苗族史論の系譜——西欧東洋学から日本東洋学へ

(1) 苗族先住説・漢族西來說の形成

(2) 中国通史・東洋史の編纂と漢族西來說・苗族先住説

(3) 教科書に見る上古史認識・西來說の多様性

(4) 文明史論と苗族先住説

(5) 苗族先住説と田能村梅士

苗族史の近代

(6) 苗族先住説と高楠順次郎

(7) 苗族先住説と鳥居龍蔵

(8) 日本における苗族先住説・漢族西來說の消長 [以上、本篇]

三、近代中国の苗族史論——「同化」「排除」と清末民族論 [以下、続篇]

(1) 中国知識人と「苗」認識

(2) 苗族先住説の発見

(3) 近代啓蒙思想としての苗族先住説

(4) 「排滿」主義者の民族史観

(5) 苗族先住説をめぐる論争

四、「五族共和」と苗族先住説——苗族史論のゆくえ

五、まとめ

はじめに

司馬遷の『史記』は黄帝を歴史の初めに据えた。その後二千年の時を経て、黄帝は、清朝打倒を目指す革命派の中国知識人たちによって、漢族統合のシンボルにまつり上げられることになる。彼らの多くは、黄帝が漢族の先祖たち

を引き連れてはるか西方からやって来た人物であると固く信じていた。漢族は外来であつて土着でないとする、今日から見れば奇妙としか言いようのないこの学説は、政治主張を異にする知識人にも受け入れられ、またたく間に内外の中国人社会に流布していった。一連の言論を総称して漢族西來說と呼ぶ。

近代中国における漢族西來說のユニークさは、黄帝を境にして、以後「唐虞（堯舜）」へと続く時代と、黄帝より前の時代とを区分し、両者の關係を、当時最先端の学術的知見によつて、民族論的視角から解釈し直そうとした点である。黄帝が外来であれば、それ以前は先住民族の歴史となるが、漢族でなければそれはだれか。当時の中国知識人たちは、黄帝以前の先住民族として、中国古典中に見られる「三苗」という存在に注目した。「三苗」は黄帝以後の時代において、古の帝王たちに反逆した存在として、しばしば文献中に現れる。そして、その末裔として信じられたのが、今日、中国南方の湖南・雲南・貴州などの地に暮らす少数民族の苗（ミャオ）族であつた。漢族西來說は、この苗族先住説と対になつた学説だったのである。

漢族西來說を支持した中国知識人たちが標榜していたのは、清朝の支配者である満州族への敵愾心をむき出しにした「排滿」思想と漢族主義であつた。ところがその中で、非漢民族である苗族については、かえつて先住者として積極的に包摂されるかたちで「国家」や「国民」が構想されたのである。今日、多民族国家として存在する中国では、中華民族主義による多民族史観が盛んに主張されているが、その淵源の一つは、漢族西來說と対になつた、この苗族先住説の中に認められると言えよう。

中国革命史についての膨大な研究蓄積に加え、近代ナショナリズムに対する昨今の著しい関心の高まりの中で、清末に現れた漢族西來說については、すでに多くの研究者が注目し、それを主題とする研究が少なからず発表されて

いる^①。ところが、それが苗族先住説とセットになったものであることに注目した研究は、管見では認めることができない。一方、今日の苗族そのものについても、民族学や民族史の分野から多彩な研究が行なわれているが、漢族西來說との関係において苗族史論の変遷を説いたものは見当たらない^②。また近年では、漢族西來說・苗族先住説の時代背景の一つであった、「排滿」「五族共和」などの清末民国初期の民族思想や民族政策についても、数多くの研究が発表されているが、それらの中で関心が向けられるのはおもに滿州・蒙古・チベット族・回教徒であり、南方民族に眼を向けた議論は皆無に等しい。史学史や民族学史に関する数ある業績の中でも、上述の視点から苗族史研究の問題を系統的に論じたものは見出せない^④。

苗族先住説は、西欧東洋学に由来し、明治日本を経て、清末の中国に影響を与えたという点で、漢族西來說と相似する展開を見せたが、受容され普及していった過程や、背後にある問題意識はそれぞれ異なる。小文では、明治大正初年および清末民国初期の日中両国知識人による苗族先住説に関する各種の言説を中心に、学術史的な観点から考察を進め、近代中国における民族史観の形成について新たな研究視角を提示したいと考える。

一、苗族先住説の論理——漢族西來說との相関

苗族を中国大陸の先住民族と見なす苗族先住説の鍵となるのは、『書経（尚書）』などの中国古典に見られる「三苗」の語句と、それらに対する解釈の仕方である。近代中国知識人による諸説の中で、基本となっているのは、以下のような考え方である。①黄帝（軒轅）とそれに率いられた集団を、漢族の祖と仮定する。②黄帝（軒轅）と中原で戦い

敗れた蚩尤を「三苗」の首長と仮定する、あるいは南中国の地について言及された「三苗」の記述に注目する。③黄帝と蚩尤との戦いを外来民族と中原の土着民族「三苗」との抗争の反映と見なす、もしくは「三苗」を黄河以南の地の土着民族と見なす。④近世以後の文献で南方の異民族を「苗」と総称することが一般的となることから、それを問に置いて現代の苗族を上古の「三苗」の末裔と仮定する。⑤以上より、苗族は、黄帝を祖とする漢族とは異なる系譜の民族集団で、漢族「西来」以前の先住民族と結論付ける、というものである。

②の部分で、「三苗」を蚩尤と直結させるか、それを切り離して解釈するかによって、苗族の故地が中原を含むか否かが分かれる。しかし古典中の記述に整合しないものが多く、後述するように明治日本の論者はそこに深く論及せず、ただ漢族「西来」以前の先住民族であることだけを焦点として議論を行なっている。そのことが、後に日本と中国の知識人との間に、苗族先住説をめぐる似て非なる見解を生み出す要因となる。

関連する古典についての考証学的検討は、清代においてすでに極限まで突き詰められていた。そしてまた、清の雍正帝が華夷（中華と蛮夷）の別を論じた『大義覺迷錄』の中で、「有苗」の地が湖南に充てられていることから明らかに^⑤、苗族が暮らすその土地を上古の「三苗」の故地とする考え方が、清代においてすでに常識化していた様子がうかがわれる。

しかしそれらが近代の苗族先住説にカタチを変えるには、伝統的漢学起源ではない新たな要素が不可欠であった。たとえば、古典についての考証学的議論では、字句の考証に徹しても黄帝と蚩尤との間に先後関係があったのかは解明しようがなく、またそうした問題が解決されるべき課題として意識されることもない。これに対して、西欧近代の東洋学者たちは、十九世紀のアジア各地における言語学・文字学的な発見を、中国古典の解釈へと大胆に応用していつ

たのである。

そもそも、漢族が中国土着の民族ではなく西方からの移住、もしくは文字など中国文明の構成要素が中国自生ではなく西方からの伝播によるとする理解は、キリスト教的世界史である「普遍史」に基づく通説として、西洋に古くから存在したものであった。十九世紀以後、西アジアや中央アジアで相次いだ様々な学術的発見は、従来知られていた中国上古史に関する記事を西方に結び付ける技巧を競い合う風潮を生み出し、その中で、従来からの通説が、「科学」の衣をまとって、漢族の「外来」起源説へと姿を変えたのである。⁽⁶⁾

しかし漢族が「外来」ならば、無主の土地でない限り、そこには先住民族が存在しなくてはならない。そこで、「三苗」に関する経学的考証や、苗族の由来に関する中国国内における通説が意味を持つことになった。それはさらに歴史時代における漢族の南下と勢力拡大、非漢民族への圧迫という事実とも重ねられた。こうしてまず西欧の東洋学者によって苗族先住説が形作られ、明治日本を経て、小文冒頭で述べたような中国知識人による議論へと展開していったのである。以下、それを順を追って検討していくことにしよう。

二、苗族史論の系譜——西欧東洋学から日本東洋学へ

(1) 苗族先住説・漢族西來說の形成

中国大陸における苗族の存在自体については、フランスのイエズス会士デュアルド (Du Halde) が一七三五年にパリで刊行した中国全土の地誌である『中華帝国全誌』に、十頁に及ぶ詳細な記述がすでに認められる。⁽⁷⁾ 十八世紀西欧

の中国認識に多大な影響を与えた本書を通じ、西欧諸国の知識人にそれが広く知られるところとなったと考えられる。苗族先住説の前提となる漢族西來說については、中国に対する西欧知識人による諸言説の中に、さまざまなかたちで確認できる。⁽⁸⁾一八六五年に、香港のレッグ (James Legge) が『書経 (尚書)』を翻訳した際、その序論の中で漢民族をノアの子孫とする考えに立って漢族西來說が主張されているのはその一例である。⁽⁹⁾このレッグの訳書の出版が西洋におけるその後の中国古典学の研究において持った意義は計り知れないが、彼の中国上古史観の根底にあったのは、キリスト教的世界史である「普遍史」からの影響だったのである。注目すべき点は、レッグが漢民族の起源地として黒海とカスピ海の地域を想定していることである。その典拠は明示されていないが、当時、印欧語の起源地として注目されていた地域と重なることから見て、ミュラー (Max Müller) を中心に推進され、西欧の東洋学者の間に普及し始めていた、いわゆるアーリアン学説⁽¹⁰⁾からの影響があった可能性も考えられよう。

「普遍史」に基づく漢族西來說を骨子とする中国上古史についてのレッグの着想は、その後、北京在住のエドキンス (Joseph Edkins) や、イギリスで活躍したラクペリー (Terrien de Lacouperie) らの論著に引用されている。『書経』の翻訳というレッグの堅実な業績の中で着想として述べられたに過ぎない漢族西來說が、東洋学者による学説として同時代の西洋知識人に多大な影響を及ぼしたことがうかがわれる。

エドキンスは、一八七一年にロンドンで刊行した著書の中で、「普遍史」に立脚しつつ、言語学によって印欧語・中国語同祖論を主張し、レッグの説を独自の漢族西來說へと吸収発展させた。⁽¹¹⁾一方のラクペリーは、考古学的発見が相次いでいたバビロニア学の成果を踏まえ、一八八〇年および一八八七年に、漢民族およびその後の文明的要素そのものがともに西アジアのバビロニア起源であるとする仮説を、ロンドンで論文として発表している。それが後に、著名

な『初期中国文明の西方起源』という専著としてまとめ上げられたのは、一八九四年のことであつた。ラクペリーのこれらの論著の中には、レッグやエドキンスの学説への言及が各所に認められる。¹²⁾

レッグ、エドキンス、ラクペリーの三者を、小文のテーマである漢族西來說と苗族先住説との関係から比較してみよう。レッグが訳書の序論の中で漢族西來說を主張したことについては、すでに述べた。レッグはその序論で、漢族に先立つ「蛮族」の存在については認めるが、「普遍史」的一元論の立場から、それが漢族と同源で、漢族と同じく「西来」したものであるとする考え方を示している。

一方、エドキンスの著書での議論の中心は、中国語を他言語と比較してその位置付けを明らかにすることにあつたが、「普遍史」に基づく民族一元論を信じていた彼は、レッグの説を援用し、自らの研究成果を漢族西來說に読み替えて発表したのである。このエドキンスの研究で注目されるのは、漢族西來說の採用に加え、古典の「三苗」の末裔が現代の苗族であるとし、漢族の「西来」の結果、中原地域から南に追われ、それがより南方にまで影響を与えたという仮説を述べている点である。これはレッグには見られなかつた議論であり、言語学に立脚した彼のこの仮説が、他に及ぼした影響は想像に難くない。

事実、ラクペリーはその後、レッグやエドキンスの研究を継承して、中国南部からインドシナ半島にかけての地域の諸言語についての研究を進めた。ラクペリーは、まずシャン(タイ)族について起源地の華南から南下したという仮説を提示し、さらに台湾先住民族について研究を進め、その一部の言語が華南少数民族の言語と相似する要素を持つという問題提起を行ない、ひいては一連の研究成果を『漢民族以前の中国の諸言語——漢民族の占拠以前に中国本土において先住民族によって話された諸言語の研究』にまとめ、一八八七年にロンドンで刊行したのである。¹³⁾

ラクペリーが、これと同時期に漢族西來說を主張する論著をまとめていることについてはすでに述べた。エドキンスとラクペリーは、レッグによる着想をもとに苗族先住説と漢族西來說を対になった学説としてまとめ上げ、それを自説の中で体系化させていったのである。

もちろん個々に相違点もうかがえる。漢族西來說については、エドキンスが言語学に基づいて民族としての「西来」に重点を置いて論じ、文字などの文明要素は東遷後における漢民族の独創とした。これに対し、ラクペリーは、漢民族そのものに加え、その祖とされた黄帝その人、さらには文字・曆法・法律制度などの文明要素もすべて最初からセツトで「西来」したと主張したのである。

苗族先住説についても、両者の方向性には違いがないが、仮説としてのエドキンスの議論と、文献に頼ったとはいえ圧倒的なデータをもつて実証しようとしたラクペリーの成果との間では、質的な相違が認められよう。このように、両者は漢族西來說と苗族先住説をセツトをなす学説としてともに発展させる役割を担ったが、苗族先住説を完成させた功労者はラクペリーと評価すべきであろう。

ラクペリーとその学説については、従来も多くの研究者が注目してきたが、漢族西來說に関心が偏り、彼の学説が以上で述べたような、多民族史観というべき複合的な性質を備えていたことには、これまで注意が向けられてこなかった。以下で明らかにしていくように、漢族西來說は当初から苗族先住説と対になった学説として東アジアの知識人に受容され、日本や中国でそれぞれに消化・発展・衰退という一連の経過をたどったのである。

(2) 中国通史・東洋史の編纂と漢族西來說・苗族先住説

レツグの香港での翻訳活動には、近代中国における東西文化交流の先駆者として知られる王韜など、中国知識人も参与したが、「普通史」に基づいた「西來說」が当時の中国国内に受容された痕跡は乏しい¹⁴。またエドキンスやラクペリーの「西來說」についても、それが当時の中国国内に直接受容されたという事実は認められない。

これに対して日本では、ラクペリーらが相次いで関連する著作を発表した時期からやや遅れ、西洋学術界からの刺激と日本を取り巻く国際環境の変化を受けて、東洋学や東洋史という新興の学術が形作られ、その中で漢族西來說や苗族先住説が受容されたと見られる¹⁵。

それが最初に目に見えるかたちで現れたのは、学校教育の歴史教科書の領域であった。明治維新後、学校では「支那史」の教科書として『十八史略』などが用いられたが、「万国史」についての欧米系の歴史教科書とは不釣合いであることから、それらに代わる歴史教科書が求められた。そこで那珂通世が執筆し、刊行したのが、『支那通史』（中央堂〔東京〕一八八八年九月刊）であった。彼はその中で、

清国の人民は……種類甚だ多し。其の大なる者六あり。支那種と曰ひ、韓種と曰ひ、東胡種と曰ひ、韃靼種と曰ひ、匈奴特種と曰ひ、江南諸蛮種と曰ふ。支那種は即ち漢人なり。……江南諸蛮は小種落甚だ衆く、……其の稍や著るるもの三種あり。一を苗と曰ひ、湖南・貴州に居る。……諸種皆性極て頑陋にして、衆夷の中に在つて、最劣と為す。蓋し皆太古土人の遺裔にして、漢人の繁殖するに及び、退て山谷に拠れる者なり。

唐虞よりして上は、邈として考ふ可からず。……旧史の太皞・炎帝・黄帝の事を記する者も、亦多く荒誕の説を雜へ、今其の真偽を辨ずるに由なし。……今唐虞国勢の隆なるに由り、意を以て之を推すに、支那の開化に向

ふは、蓋し已に數百千年を歴たり。且つ漢人は恐らくは當に支那の土人に非ざるべし。……漢人先に中疆に居らずして、北帯より起る者は、蓋し其の本土西方に在り、河〔黄河〕流に沿て東遷せるに由るなり。

と述べ、「支那種」が「支那の土人」ではなく、「西方」から黄河伝いに東遷した民族であり、「江南諸蛮種」は「太古土人の遺裔」で、漢人によつて南方の山谷に追いやられた存在であるとしている。唐虞（堯舜）より前の伝統的歴史認識については疑念を示すが、一方で開化から唐虞までの前史の存在を想定している。

この那珂『支那通史』に続いて歴史教科書として刊行された市村瓊次郎らの『支那史』（林縫之助〔東京〕一八八九年刊）には、以下のような記述がある。

支那の境内に住する人民は、……今其重なるものを挙ぐれば、苗人種・漢人種・蒙古人種・滿州人種・回々人種の五種となす。苗人種は雲南・貴州の山中に住み、……此人種は最古き人種にして、其初め楊子江及び淮水の間に住し、漢人種を困めたる三苗或は有苗といへるものなり。厥後、漢人種の盛なるに及び、次第に南方に遁竄して、遂に雲南・貴州の山中に栖息するに至れり。漢人種は……太古西方より来り、苗人種を南方に駆逐して支那内地に蔓延せり。……支那内地に人民の繁殖せし其始めは茫邈として考ふ可からず。……蓋是等の人民は苗人種及び漢人種なり。漢人種は西北方より来りて黄河の沿岸に住居し、苗人種は南方より来りて楊子江の沿岸に栖息せしなり。然るに歲月を経るに従ひ漸く繁殖して互いに鬭争をなししが、苗人種遂に駆逐せられ、漢人種のみ各地に蔓延するに至れり。

太古の帝王にして後世三皇と称する者……に就きては種々の怪説を伝へ、……皆妄誕にして取るに足らず。然れども黄帝以後の事に至りては稍信を措くべきものあり。……黄帝の時より文字のありしこと明なり。

淮水以南の「三苗」から説き起こされる「苗人種」が、南方起源であることが説かれている点が目されるが、それが「西北方より来」たとされる「漢人種」よりも前に置かれ、「最古き人種」とされている点から見れば、漢族西來說と対になる苗族先住説に立脚していたと理解されよう。中国上古史の認識については、「三皇」から説き始めるものの、それには疑念を抱き、黄帝の事績には信を置くという、那珂とは異なる伝統的な上古認識のあり方を見て取ることができる。

また藤田豊八『中等教科東洋史』（文学社〔東京〕一八九六年刊）では、「アリアン種」に対置されるものとして「蒙古種」を挙げ、それをさらに「漢族」「苗族」「通古斯（ツングース）族」「都爾古（トルコ）族」「蒙古族」「図伯特（チベット）族」「韓族」の七民族に細分し、以下のように述べる。

第一・漢族…自ら称して夏といふ。……その起原につきては、今なほ種々の説ありて決し難しと雖も、その史的討究に値すべき時代に於いては、支那黄河の北岸に棲息し、漸次他族を駆逐して、遂に支那全土に蔓延せしが如し。第二・苗族……漢族の未だ南下せざりし以前に当たりて、此族河（黄河）江（長江）の間に住し、実に支那最古の人種とす。……現時は湖北・湖南・四川の一部、及貴州・雲南の殆ど全部に居る。漢族と同化せず、依然未開の陋族に安んず。

支那の文化は、黄河の北岸に栖息せし漢族に起る。伝ふる所によれば……後世之を三皇と称す。黄帝は軒轅氏と称す。……以上の伝説は、今を距る四千数百年前のことに属し、漢人種の支那西北黄河沿岸に於て部落をなし、その開明の度頗る他の種属に越ゆるものありしを証するのみ。固より事実として信じが〔た〕きものも多し。堯舜の時に至りて人文既に開け、支那の史蹟はよりして較述ぶるを得べし。

以上の内容からは、漢族起源説に対する慎重な態度が読み取れるが、一方で苗族については、那珂・市村と同じく黄河以南の「支那最古の人種」として位置付けていることが確認できる。上古史認識については、「三皇」や黄帝から説き始めるものの、それには疑念を抱き、堯舜以後の事績には信を置くという、市村よりも那珂に通じる疑古的な上古認識のあり方を見て取ることができる。

さらに桑原隲蔵『中等東洋史』（大日本図書株式会社〔東京〕一八九八年刊）は、「東洋史の主人公」である「亜細亞人種」を「支那人種」（「漢族」「匈奴特族」「交趾支那族」と「西伯利人種」（「日本族」「通古斯族」「蒙古族」「土耳古族」）に大別し、以下のように述べる。

漢族・東洋史上尤も重要な人種にして、大抵支那本部を占領す。此族は蓋し悠久なる時代に於て、西方より支那内地に移住し来りて、黄河の沿岸に棲息し、次第に四方に蕃殖せし者に似たり。……交趾支那族・支那の西南部、即ち雲南・貴州の諸省より、安南・暹羅等、後印度諸国の大部に蔓延す。想ふに此族は、其古代に在りて、支那本部を占領せしが、漢族の為に漸次駆逐せられたる者の如し。周代以前の苗民……は蓋し此族に属す。

漢族は蓋し極めて悠遠なる時代に於て、西北方より次第に、支那の内地に移住し来りしものなり。彼等は少くとも五千年前の古代に於て、已に黄河沿岸の地に蕃殖して、……伝説に拠るに……是即ち後世所謂三皇なり。其後大凡、我紀元前千八百年〔前二四六〇年〕の頃に当りて、黄帝出でしが……帝の時……文字を製作し、曆数を改良し……衣冠を制す。

上古の「苗」を苗族と結び付けていることから見て、桑原が市村と同様に、漢族西來說を苗族（交趾支那族）先住説とセットで支持していたことは明らかである。ただし、交趾支那族が「占領」していたという「支那本部」の範囲が、

中原を含むものとしてとらえられているのかどうかについては判然とし^(補注)ない。上古史認識については、伝説としながらも「三皇」の時代を認め、黄帝の事績は信ずるとい^(補注)う、市村と共通する態度が確認できる。

(3) 教科書に見る上古史認識・西來說の多様性

これらの記述は、一体どのような学説や論拠に基づいて執筆されたのであろうか。那珂については、まず一つに、中国の疑古的考証学からの影響を受けている可能性が推測される。那珂が清代の疑古思想を代表する崔述の『考信録』の入手を試みたのは一九〇〇年の狩野直喜の清国派遣の際のことだが、桑原によれば「かねて其の為人と所説を慕はれて」いたと言⁽¹⁷⁾うから、疑古思想の影響は、より早い時期から那珂に及んでいた可能性がある。那珂については、またこれとは別に、高等師範学校同僚の三宅米吉が後に回顧した中で、三宅が欧米留学から帰国した際、「欧州諸家の東洋に関する著書数十種」を持ち帰ったところ、当時『支那通史』の起稿中であつた那珂が特に「西域に関する歐人の研究」に関心を示したのでそれを提供した、と述べていることが注目される。三宅の帰国は一八八八年二月で、『支那通史』刊行の半年前に当たる。⁽¹⁸⁾前掲の『支那通史』の記述は、清代の疑古思想と西欧東洋学の那珂における融合として評価すべきであろう。

桑原隲蔵については、『中等東洋史』の刊行二年前の一八九六年に、ラクペリーの学説を中心に、西洋人による「西來說」を論評した一文を発表しており、それによって彼の「西來說」に対する考え方や上古史認識を知ることができ^(補注)る。桑原はその中で、堯舜より前の歴史に関する伝承に否定的な西欧学術界の風潮に批判を加え、そこに西洋中心主義を疑い、特に漢民族・文明要素一体としての西アジア起源を主張するラクペリーの「西來說」を檜玉に挙げている

が、一方で、漢民族が「西来」である可能性自体は否定せず、漢民族をアーリア人種と同じ中央アジア起源で、原初から交流があり、東西交渉が有史以来継続したために、東西の文明で相似する現象が認められるという主張も同時に行なっている。桑原のこうした中央アジア起源「西來說」の背景には、彼自身が触れているように、ドイツの地理学者であるリヒトホーフエン (Ferdinand Freiherr von Richthofen) による中央アジア起源「西來說」からの影響があったと見られる¹⁹⁾。

上記の各文献は、いずれも新進の歴史学者の手により、短い期間に教科書として相次いで世に出されたものであり、内容面でも相似する点が多いが、以上で見たとように、漢族西來說に対する態度や、その前提となる中国上古史の歴史認識については、一定の差が認められる。しかしその中でも、黄河あるいは淮水以南の地に先住民族として、もともと苗族が展開していたという考え方については、各論者に共通して見られる点である。苗族先住説は、わが国において東洋学という新たな学術が形作られた時代に、その開祖と目されるこれらの人物によって、漢族西來說よりも抵抗なく受け入れられた学説であったと理解されよう。

那珂・市村・桑原・藤田はともに漢学分野の出身だが、桑原と藤田はその後「支那」の枠組みを越えて、今日で言う東西交渉史の分野に新たな活躍の場を見出した²⁰⁾。漢族西來說と苗族先住説の流行が、漢学的な支那史の枠組みの解体と、東洋学的な東洋史学の形成という時代を象徴する出来事の一つであったことがうかがわれる。

(4) 文明史論と苗族先住説

あわせて注目されるのは、これらの教科書の中で「西來說」によって説明がなされる際に、漢民族の起源地につい

ては、いずれも「西方」ないし「西北方」という漠然とした記述がなされるにとどまり、漢民族・文明要素一体としての西アジア起源を唱えたラクペリー説を支持したものが、一つとして確認できない点である。⁽²¹⁾ラクペリーの著書『初期中国文明の西方起源』は、刊行から五年後の一八九八年に、早くもその一部が日本語訳されている。⁽²²⁾しかしそれは明治日本の東洋学者には受け入れられることがなく、それ以外の分野や、後述するように中国知識人の間で、かえって広く影響が見られたのである。

すでに先行研究において指摘されているように、ラクペリーの学説が日本にそしてさらには中国へと紹介されるにあたり、最も大きな役割を果たしたのは、白河次郎ほか『支那文明史』（博文館〔東京〕一九〇〇年刊）である。白河らは、同書において学説そのものを要約して紹介したのみならず、その内容を踏まえて、中国上古史に対する自己の認識を次のように述べている。

支那文明の源泉たる黄河・楊子江の流域より現出せし民族には果して如何の種族ありしか。(一)苗族は、支那最古の種族なりき。……漢族の未だ南下せざりし以前に当りて、此の族は黄河・楊子江の間に住せり。……現時に至りては、湖北・湖(湖)南・四川の一部及び貴州・雲南の殆ど全部に居り、漢族と同化せず、依然未開の陋俗に安んずる者なり。……(二)漢族は、西方亜細亜のカルジアより来れり。黄帝は之れを率いてパミールより新疆の大平原を東に横断して黄河の流域に入り、……黄河を渡りて南下し、苗族を逐ふて遂に支那本部全土に蔓延するに至りたり。

その内容は、苗族を筆頭に置くことに示されるように、明らかに苗族先住説に従ったものであり、また続く漢族の記述は、西アジア起源の漢族西來說を基軸とするラクペリーの学説を反映したものである。苗族以下、七つ挙げた民族

についての記述内容を細かく見ると、漢族以外についてはすべて、上述の藤田『中等教科東洋史』の書き写しであることが分かる。すでに見たように藤田は漢族西來說に懐疑的であった。白河はその部分を、上記のようなラクペリーの学説を踏まえた内容に書き換えたのである。

このラクペリーの学説を翻訳を通して学術界でいち早く受容したのは、日本史学者の久米邦武であった。明治初期に、官撰日本史の編纂に携わり、考証によって日本史に次々とメスを入れ、重野安繹とともに「抹殺派」などと呼ばれた久米は、一八九二年に論文「神道は祭天の古俗」のために「不敬」を問われ、帝国大学の職を追われた。それから十三年後に彼が上梓した『日本古代史』（早稲田大学出版部〔東京〕一九〇五年刊）は、「南北人種」の競争として日本古代史を説き出す構成を採用し、その冒頭で「南北人種」の競争として東アジアの上古史を描く試みを行なっている。久米はその中で「南支那の原人」として「南種」である苗族の歴史を「先住説」によって記述し、またそれに対して「北種」である漢族の歴史を「西來說」によって記述したのである。そこにおいて久米はラクペリー説を引用し、それに接した経緯を回顧しつつ、関連する自らの研究蓄積を踏まえて、ラクペリーによる西アジア起源「西來說」に同調している。久米はこの著書に先立ち、独自の視点によって中国上古史や苗族先住説に言及しており、当初からラクペリー説に依拠していたわけではない。しかし後年この『日本古代史』に見られるようなかたちで中国上古史に対する認識を体系的にまとめ上げるにあたっては、久米自らが述べているように、翻訳を通したラクペリー説からの刺激があつたと理解されるのである。

同時期には、法学者で、日露戦争時の「七博士意見書」で知られる戸水寛人も、同様にラクペリー説を引用しつつ、「支那人」を外来と征服による「混合種族」としてとらえた、独自の「西來說」を主張しているが、彼の学説は、中国

に西来した種族が、西アジア起源や印欧語族ではなく、中央アジア起源のウラル・アルタイ語族とされている点において、ラクペリー説とは質的に異なる。その背景には、西欧人によるアーリア主義へのアンチテーゼとして、当時のトルコやハンガリーで形成されつつあったトゥラン（ツラン）主義⁽²⁶⁾、および中央アジアを舞台にした列強諸国による各種の学術成果からの影響などが推測されよう。

(5) 苗族先住説と田能村梅士

戸水と同じ法学者による議論として特筆すべきものに、田能村梅士『世界最古の刑法』（有斐閣書房〔東京〕一九〇四年二月刊）がある。田能村はまず中国の民族起源説について、

欧州諸学者の新研究に依れば、……北方河水〔黄河〕流域の人民は、後日外来の種族に係り、支那固有の種族に非ず。蓋し支那固有の種族は、必しも一種族ならざりしならむも、其の最も著大なりしものは、三苗の種族にして、苗族は啻に江水〔長江〕の南北兩岸のみならず、恐くは河水の南岸に至るまで分布せしなるべく、次に来りしものは交趾支那族なり。交趾支那族は南方より来りて、主として江水の流域に分布し、苗族と相並びて支那の大部を占領したり。而して河水の北岸に来りし人民は、其後に来れるツラン人種の漢族にして、漢族は固と中央亜細亞より遷徙し悠遠なる歳月を経て、河水の上流より遂に支那本土に入り、乃ち河水の流域に定住したりしなり。〔①〕

と述べ、黃河流域の漢族が「外来の種族」であり、「支那固有の種族」としては苗族が最大で、長江から黃河南岸にかけて展開したと推測されることなどが指摘されている。田能村はこれに続けて、

然らば則此二者文明之先後は如何、二者相互の關係は如何。幾千年後の今日に於ける苗族は……往古より全然非文明的種族なりとするは、稍速了の見たるを免れざるべく、……予は南方江水の流域に於ても、既に多少文明の濫觴ありしことを信じ、且此南方の文明は、寧ろ北方の文明よりも早く濫觴せしことを信ず。〔②〕

且夫れ吾人は南方の文明が、北方よりも早く發達せし、歴史上の一証左を有す。……他なし一部の『尚書』是なり。……是故に予は支那古代の文明は、北方に於て河水に因り濫觴し發達せしのみならず、南方に於いて更に江水に因り、濫觴し發達せしこと、殊に南方は寧ろ北方よりも早かりしことを断定せんと欲す。〔③〕と述べ、黄河・長江両者にそれぞれの文明起源が想定され、長江の方により早い文明起源を認めることができるという、きわめて特徴ある仮説を提示している。⁽²⁷⁾

田能村がその証拠として挙げるのは、『尚書（書経）』であるが、実は彼がこのような民族論・文明論を展開した理由は、この『尚書』の記事にあった。田能村は本書の刊行に先立って、一九〇一年に發見され、世界最古の法典として注目を集めたハンムラビ法典に関心を持ち、それより古い法律の存在が中国古典中に確認できると考えた。⁽²⁸⁾そしてその着想を、『尚書』呂刑篇の中に見える「苗民」の刑についての記述を軸に發展させたのが、この著書だったのである。同書の中で田能村は、苗族の歴史的位置付けについて、

然らば則南方の文明が、爾後聞ゆる所なきは何ぞや。他なし前に一言せし如く、北人の為に征服せられたればなり。蓋し黄帝は屢征戦せし人にして、炎帝と戦ひ、蚩尤と戦ひ、皆之を敗り、……炎帝及蚩尤を征服せし余威を以て四方を討平し、……南伐して江水を渡り、当時苗族の首府たる地方、即ち洞庭・彭蠡二湖の間……を経て、長沙附近まで赴きしものにして、南方は此時殆ど北方の君主たる黄帝の為に征服せられしなり。〔④〕

と述べており、これによつて彼が黄帝時代の苗族の分布域を長江中流域と考えていたことが分かる。蚩尤と三苗との関係については、種々の示唆的な記述が見られるのみで、田能村の考えを特定するのは困難である。

先に見たように、黄河流域の漢族が中央アジア起源の「ツラン人種」という「外来の種族」であり、これに対する「支那固有の種族」として苗族が想定されていることから見れば、彼の考えが漢族西來說とセットになった苗族先住説に立脚していたことは疑いない。ただし田能村の学説は、黄帝率いる漢族が西アジアから文字や暦法・法制度などを中原に持ち込んだとするラクペリーの「西來說」とは異なり、むしろ法制度という文明要素が南方起源の中国自生のものであることを主張する独自のものであった。

田能村は「欧州諸学者の新研究」に依拠したと述べているが、それが具体的にいかなる先行研究であったのかについては明らかでない。ただ彼が文中で漢族を「ツラン人種」としているのは、本書に序文を寄せた戸水寛人の議論と共通する点であり、あるいは戸水の所説を通じてラクペリーなどの「欧州学者の新研究」に接したと推測できるかもしれない。

(6) 苗族先住説と高楠順次郎

ところで、田能村の議論の中でもう一つ注目されるのは、苗族と同様に、漢民族よりも前に存在したと想定されている「交趾支那民族」である。上記の田能村の記述によれば、この「交趾支那民族」は苗族よりも後に「南来」した民族で、苗族よりも南の地域に展開した民族と考えられているようである。こうした地域の民族論で、田能村に先立つ業績として挙げられるのは、わが国のインド学の先駆者の一人である高楠順次郎が、一八九八年に発表した「印度

支那人種」論である。⁽²⁹⁾

高楠は、留学先のイギリスで、アーリアン学説の提唱者として名高いミュラーに師事している。⁽³⁰⁾ この論文の中で、高楠は言語学的な見地から、中国語・チベット語・タイ語・ビルマ語・ベトナム語を一つのグループにまとめ、これらを民族に置き換えて「同種」と見なし、それを「印度支那人種」という語句で総括した。そして「三苗」をめぐる中国上古史認識に照らして、その「人種」の「太初同住の根源地」を、長江中流域に推定したのである。

高楠の「三苗」の歴史に関する考察はごく少量で、それが具体的にどのような史料や研究に依拠したのかについては不明である。しかし「三苗」に関して挙げた中国古典中のいくつかの記述に加え、今日の雲南・貴州の「苗族」が「原人種」であると指摘している点などから見て、それが苗族先住説に立脚したものであったことは間違いない。

高楠が留学から帰国したのは一八九七年であるから、翌年発表されたこの学説が留学成果の一端であったことは疑う余地はない。論文中ではイギリスのウエード (Thomas Francis Wade)、『ドイツのコンラディ (A. Conrady)』と交流したことが言及されており、そうした西欧東洋学の影響の中で形成された学説として理解される。

(7) 苗族先住説と鳥居龍蔵

明治日本における苗族先住説を語る際に忘れてならない存在は、民族学者の鳥居龍蔵である。戦前のアジア各地で彼が行なった研究活動は、近代日本の学術史において、現地調査に基づく先駆的学問実践としての意義を持つ。高楠が上述の「印度支那人種」論を発表した年にも、鳥居は台湾南部の先住民を調査するため、第三次台湾調査に赴いていた。彼の台湾調査は、日本の台湾領有翌年の一八九六年から一九〇〇年までの計四回に及んだ。そしてそれが終

了した後の一九〇二年から翌一九〇三年にかけて、鳥居は新たに、湖南・貴州・雲南・四川にまたがる「西南支那」の地へ民族調査に赴いたのである。⁽³¹⁾ 彼自身が述べているところによれば、この「西南支那」調査は自らの台湾調査の延長線上に鳥居自身の希望で計画されたものであり、その際に動機付けとなったのは、台湾先住民族と華南少数民族言語の比較を試みたラクペリーの学説だったと言う。⁽³²⁾

小文の前段でも述べたように、ラクペリーには、西來說を主題とするものとは別に、南中国の少数民族言語の成立過程についての研究があった。そこで提示されたのは、漢民族が南下していく過程で、苗族など中国本土の先住民族を南中国の辺境に追いやったとする苗族先住説である。そしてラクペリーが台湾についての著書の中で提出したのが、台湾対岸の華南少数民族である苗族が、台湾先住民の一部と言語的に関連性をもつという仮説であった。鳥居は、台湾での調査成果を踏まえ、苗族の地に渡って自らの手でこの学説を検証したいという知的好奇心によって、「西南支那」調査を計画したのである。⁽³⁴⁾

鳥居の「西南支那」調査にあたってのこうした問題意識には、以上で述べたように、台湾そのものへの関心と同時に、漢族西來說を踏まえた中国本土の先住民族としての苗族に対する強い関心があった。鳥居は漢族西來說と苗族先住説を早くから支持していたのである。彼は「西南支那」調査への出発直前に刊行した編著の中で、以下のような民族史観を示している。

支那人……の祖先は今より凡そ五千年程以前、パミルの東、崑崙 (Kuen-Lun) 山附近より黄河 (Hoang-ho)

揚子江 (Yangtse-Kiang) をつたいて、支那の西北 (Shen-Si) に降り来り移住なしぬ。この時すでに茲には口ロ口 (Lolo) 又はミャオ (Miautse [苗族]) 等の土蛮棲息なし居りたれば、彼等はこの土蛮とはげしく戦ひ、これを征

服し、彼等を其他〔地〕より追い退け、遂に黄河・黄〔揚〕子江畔に一大帝国を建つるに居たりぬ。彼等の歴史は紀元前殆んど二千三百五十年の頃より始めらる。……支那人の未だ今日の地に移り来らざりし以前、此地に住居せし、所謂苗族 (Miao-see) なるものも支那的種族に属す。今日彼等は支那人の爲めに追ひ退けられ、僅かに雲南・貴州等に住居するに至りき。⁽³⁵⁾

鳥居の中国民族史觀が漢族西來說と苗族先住説に立脚していたことは、「西南支那」調査後に刊行された調査報告書に残した以下の記述に、より顕著に見て取ることができる。

支那の古書たる『書経』を繙く毎に、余が一種云ふ可からざる感興を以て読むは、彼の「三苗」記載の條なり。漢民族の未だ侵入せざりし以前にありては、其地の中央部及び南部は彼等の盛大なる居住地なりしなり。……昔日の三苗の国は今や悉く漢民族の有に歸し、苗族は僅かに当時貴州省附近に存在するに至れり、この状態たる恰かも残りの雪の如き感あり。支那の古代史上に於て、否な東亜の古代史上に於て最も著明なりし三苗の状態は實に以上記するものの如し。吾人は今筆を投じて其当時の彼等を推想す、又豈に一種の感慨なき能はざらんや。⁽³⁶⁾

鳥居の回顧によれば、「南支那」調査からの帰国後、彼の関心は苗族を含む「印度支那民族」に向けられたと言うが、それが前述の高楠順次郎の「印度支那人種」論といかなる關係をもつものであつたかについては不明である。ただし、上述のように高楠の学説は漢族西來說とは無關係なものであつた。漢族西來說と苗族先住説に依拠しながら、「印度支那民族」と苗族、さらには台湾先住民族に及ぶ範囲で民族史を体系付け、それを多くの論著にまとめ上げたという点で、鳥居龍蔵が「苗族史の近代」において果たした役割はきわめて大きい。実際にその学説は、次章で見えるように梁啓超など同時代の中国知識人にも少なからずの影響を及ぼすことになるのである。

(8) 日本における苗族先住説・漢族西來說の消長

以上では、まず十九世紀の西欧東洋学における苗族先住説・漢族西來說の形成について概観し、次いで明治期の日本における両学説の受容とそれに関わる学術史的展開について整理を試みた。当時の日本でこのような独自の発展を見せた苗族先住説は、折りしも北京での政変を避けて疎開してきた梁啓超によって日本で発見され、政治的な表象としての意味を付与されることになる。そしてそれはその後、政治的立場を超えて、在日中国知識人の間にまたたく間に広がり、辛亥革命へと向かう時代のうねりの中で、さらに独自の発展を遂げていくのである。

対照的にその後の日本においては、苗族先住説への関心は、日本民族論への応用以外、次第に見られなくなっていく。「西南支那」調査の後に「印度支那民族」に対する強い関心を抱いた鳥居でさえも、再び現地に赴く計画を実現することはできなかつた。また彼が提唱した「印度支那民族」研究についても、その後日本においては長い間埋もれられて顧みられず、鳥居自身も、南進から北進へと時代の関心が転換する中で、活動の舞台をアジアの東北部へと移していったのである。⁽³⁸⁾

東洋史学者によって執筆された教科書の分野でも、一九〇四年に教員の参考書として刊行された桑原隲蔵『東洋史教科書備考』（開成館〔東京〕⁽³⁹⁾）では、冒頭に「苗族（支那の原住民）」という項目が設けられていたが、一九一四年に改訂増補版として刊行された桑原『東洋史教授資料』（開成館）では、その項目が削除されている。桑原はこの時期、「南北支那論」として知られる中国史論を提示するが、彼が「北支」との史的関係の中で描く「南支」の歴史に、苗族が登場することはない。⁽⁴⁰⁾ 大正期に入り、苗族先住説への関心が低下していった様子がかがいがい知ることができる。当時の日本では、甲骨文字の真偽をめぐる論争が展開し、また遼東などの地では新たに考古学的成果も現れ始めていた

のであり、かつて先住民族として仮想された苗族とは異なる部分で、中国上古史の復元が試みられようとしていたのである。⁽⁴⁾

その一方で前掲の『東洋史教授資料』には、

漢族の起源如何は至難の問題なり。……ラクペリー氏(が)……一八九四年に公にせし『支那文明西方起源論』は少からず斯学界を賑はせり。著者は別に所見ありて、容易に是等の所説の何れにも賛同せず。元來今日支那本部を占領せる漢族は、外来人種にして、然も西北の方面より支那に移住し来り、先づ黄河沿岸に蕃殖し、次第に南進して、遂に今日の状態を呈するに至りしことは、疑ふべからざる事實なり。……南方一帯の地は、反りて苗族其他の蛮夷の占領に帰せしが如き、……皆この事實を証明せるものといふべし。……太古の世には、西の方ペルシアの方面に文化を伝えしアーリアン族も、南の方印度の方面に文化を伝えしアーリアン族も、東の方支那の方面に文化を伝えし漢族も、皆等しく中央アジア附近に棲息せしものならんと信ずるなり。

という記述(「漢族の起源」)も見られ、この内容により、とくに漢族西來說については大正期においても根強い支持があつたことが読み取れる。

従来の研究では、ラクペリーの主唱になる西アジア起源の「西來說」が注目されるあまり、ほとんど注目されてこなかったが、小文で個別に検討したように、当時の日本の学术界には、中央アジアや広義の「西北」を推定故地とする多様な「西來說」が存在していたのであり、また対応する苗族先住説への理解と受容の仕方にもさまざまなかたちが存在した。明治期の日本や清末の中国では、西アジア起源とするラクペリーの学説に対し、支持だけではなく批判も見られたが、それらの批判者もまた、多くの場合、こうした中央アジア起源など広義の「西來說」や苗族先住説の

支持者であったことに注意しなくてはならない。⁽⁴³⁾

〈以下、続編〉⁽⁴⁴⁾

【註】

(1) 王仲孚「中国民族西來說之形成与消叙的分析」『中国上古史專題研究』國立編譯館（台北）、一九九六年、石川禎浩「二十世紀初頭の中国における『黄帝』熱」『二十世紀研究』三、京都大学学術出版会（京都）、二〇〇二年、楊思信「拉克伯里的『中国文化西來說』及其在近代中国的反響」『中華文化論壇』二、四川省社会科学学院（成都）、二〇〇三年、孫江「連続性と断裂——清末民初歴史教科書中の黄帝叙述」『新社会史』三二：時間・空間・書写』浙江人民出版社（杭州）、二〇〇六年ほか。漢族西來說が、単に漢民族の起源論にとどまらず、同時に中国国内の少数民族論を織り込んだ、複合的な性質を持つものであったことは、これらの先行研究において、いまだ十分に認識されていない。

(2) 翁家烈「第一章 族源和遷徙」『苗族簡史』貴州民族出版社（貴陽）、一九八五年、胡起望ほか編『苗族研究論叢』貴州民族出版社、一九八八年、Diamond, Norma, "Defining the Miao: Ming, Qing, and Contemporary Views", *Cultural Encounters on China's Ethnic Frontiers*, Seattle and London: Univ. of Washington Press, 1995、伍新福『中国苗族通史』貴州民族出版社、一九九九年、Hostetter, Laura, *Qing Colonial Enterprise: Ethnography and Cartography in Early Modern China*, Chicago and London: The Univ. of Chicago Press, 2001ほか。なお、漢族西來說と関連つけたものではないが、近代中国の民族主義思潮と苗族史論との関係性に言及する論考として、武内房司「歴史のなかの苗族」『へるめす』五四、岩波書店（東京）、一九九五年があり、また苗族の外來起源説の一つとして苗族西來說に言及するものに、石朝江「世界苗族遷徙史」貴州人民出版社（貴陽）、二〇〇六年がある。

(3) 平野健一郎「中国における統一国家の形成と少数民族」『アジアにおける国民統合』東京大学出版社（東京）一九八八年、Dikotter, Frank, *The Discourse of Race in Modern China*, London: Hurst & Co., 1992（楊立華訳『近代中国之種族觀念』江蘇人民出版社（南京）、一九九九年）、村田雄二郎「中華ナショナルリズムと『最後の帝国』」『いま、なぜ民族か』東京大学出版会、一九九四年、佐藤豊「清末における民族問題の側面」『愛知教育大学研究報告（人文・社会科学）』四五、愛知教育大学（刈谷）、一九九六年、毛里和子「周縁からの中国」『東京大学出版会』一九九八年、松本ますみ「中国民族政策の研究」多賀出版（東京）、一九九九年、齊藤道彦「中

- 国近代と大中華主義」『民国前期中国と東アジアの変動』中央大学出版社（八王子）、一九九九年、孫隆基「清季民族主義与黄帝崇拜之發明」『歴史研究』三、中国社会科学雜誌社（北京）、二〇〇〇年、黄興濤「『中華民族』觀念萌生与形成的歴史考察」『辛亥革命与二十世紀的中国』中央文献出版社（北京）、二〇〇二年、坂元ひろ子『中国民族主義の神話』岩波書店、二〇〇四年、坂元ひろ子『中国史上の人種概念をめぐって』『人種概念の普遍性を問う』人文書院（京都）、二〇〇五年、林義強「排滿論再考」『東洋文化研究所紀要』一四九、東京大学東洋文化研究所（東京）、二〇〇六年、王柯『二十世紀中国の国家建設と「民族」』東京大学出版会、二〇〇六年。
- (4) 陳連開「関于中華民族起源学說的由来与発展」『中華民族研究新探索』中国社会科学出版社（北京）、一九九一年、王建民『中国民族学史』雲南教育出版社（昆明）、一九九七年、田中比呂志「創られる伝統——清末民初の国民形成と歴史教科書」『歴史評論』六五九、校倉書房（東京）、二〇〇五年、高山陽子『第一章 愛国主義と民族——『中国民族史』の分析を通じて』『民族の幻影』東北大学出版会（仙台）、二〇〇七年。
- (5) 雍正帝『大義覺迷錄』卷一（沈雲龍主編『近代中国史料叢刊』三六、文海出版社（台北）、一九六九年所収）。
- (6) 漢族「外来」起源説には、「南來說」など種々の学説がある。それらの中で近代に最も主流であったのが、起源地を今日の漢民族地域から見て西方ないし西北方の地に想定するもので、小文ではそれらを総称して漢族西來說と呼んでいる。
- (7) Du Halde, *Description Géographique, Historique, Chronologique, Politique et Physique de l'Empire de la Chine*, Tome 1, Paris: Le Mercier, 1735（英訳書は一七三六年ロンドン刊）。
- (8) 前嶋信次「漢民族のオリエント起源説」『日本オリエント学会月報』二一八、同学会（東京）、一九五九年（『東西文化交流の諸相』同刊行会（東京）、一九七一年に再収録）。
- (9) Legge, James, *The Chinese Classics*, Vol.3-1 (The First Parts of the Shoo-King), Hong Kong, 1865.
- (10) Poliakov, Léon, *Le Mythe Aryen*, Paris: Calmann-Lévy, 1971（オーリア主義研究会訳『オーリア神話』法政大学出版局（東京）、一九八五年）/ Olander, Maurice, *Les Langues du Paradis*, Paris: Seuil, 1989（浜崎設夫訳『エデンの園の言語』法政大学出版局、一九九五年）/ および津田元一郎『オーリアンとは何か』人文書院（京都）、一九九〇年。
- (11) Edkins, Joseph, *China's Place in Philology*, London: Trübner & Co., 1871.

苗族史の近代

- (12) Lacouperie, Terrien de, "China and the Chinese: The Early History and Future prospects", *Journal of the Society of Arts*, No.1443, Vol.28, London, 1880, Lacouperie, Terrien de, "Babylonia and China", *The Babylonian and Oriental Record*, Vol.1, No. 8, London: D. Nutt, 1887, Lacouperie, Terrien de, *Western Origin of the Early Chinese Civilization from 2300B.C. to 2004.D.*, London: Asher & Co. 1894.
- (13) Lacouperie, Terrien de, "The Cradle of the Shan Race", *Amongst the Shans*, London: Field & Tuer, Simpkin, Marshall & Co.; Hamilton, Adams & Co., 1885, Lacouperie, Terrien de, *Formosa Notes: Mss., Languages and Races*, Hertford: Stephen Austin & Sons, 1887, Lacouperie, Terrien de, *The Languages of China before the Chinese: Researches on the Languages Spoken by the Pre-Chinese Races of China Proper previously to the Chinese Occupation*, London: D. Nutt, 1887.
- (14) 清末以前の中国国内における聖書史観の受容については、前掲注1楊思信論文参照。ラクペリーの学説形成と「普遍史」との関係については、さらなる検討の余地を残す。
- (15) 日本在住の西洋人が漢族「西來說」を応用した事例はより古くさかのぼる。一八七四年、アストンは横浜の日本アジア協会 (The Asiatic Society of Japan) において、エドキンスの印欧語・中国語同祖論を踏まえ、日本語と印欧語の近似性を指摘する講演を行っている (桶家重敏『日本アジア協会の研究』日本図書刊行会 (東京)、一九九七年)。その後の日本在住の西洋人や一部の日本人による日本民族論の中には、「アイヌ民族⇨アリア人種」論などのように、漢族「西來說」の延長に位置付けられる学説が少なくない。日本民族論については、小熊英二『単一民族神話の起源』新曜社 (東京)、一九九五年参照。
- (16) 三宅米吉「第四章 東洋史の創設者」『文学博士那珂通世君伝』故那珂博士功績記念会 (東京)、一九一五年。『十八史略』については、桑原隲蔵『十八史略』解題』『十八史略』有朋堂文庫漢文叢書、一九一九年 (『桑原隲蔵全集』以下『桑原全集』) 二、岩波書店、一九六八年に再収録) 参照。
- (17) 桑原隲蔵「那珂先生を憶ふ」『大阪朝日新聞』一九〇八年三・四月 (『桑原全集』二に再収録)。
- (18) 前掲注16文献、および斉藤斐章「文学博士三宅米吉先生小伝」『三宅博士古稀祝賀会記念誌』同会 (東京)、一九二九年 (同書所収の「三宅博士年譜」では同年一月に帰朝とある)。筑波大学附属図書館に所蔵される三宅旧蔵書には、上に挙げたエドキンスの著書も含まれているので、そのあたりが那珂に提供された可能性がある。

- (19) 桑原隲蔵「支那の太古に関する東洋学者の所説に就き」『国民之友』二八七・二八八、民友社（東京）、一八九六年三月（『桑原全集』一に再収録）。
- (20) 拙稿「歴史学者と『南支那』」松浦正孝編『昭和・アジア主義の実像』ミネルヴァ書房（京都）、二〇〇七年。漢族西來說と東西交渉史への関心との関係は検討すべき課題である。
- (21) ただし、一九〇九年に始まる白鳥庫吉の「堯舜禹桀殺説」が、伝統的な上古史認識を完全に否定し、曆法などの西アジア起源説を採用する点で、ラクペリーの「西來說」の再来と言わなければならないことには留意すべきである。
- (22) 藤田季莊訳「支那文明西起論」『天地人』一、三才社（東京）、一八九八年。
- (23) 前掲注1諸論文。
- (24) 久米は、一八九二年に「支那の起り及人種の変遷」と題する講演を行ない、中国上古史についてタブーを恐れず科学的メスを入れることを提唱している。それは彼が「不敬」を問われ、帝国大学の職を追われる二ヶ月前のことであった。久米は、本講演の中で、神農氏（炎帝）以前の歴史が黄河下流域の比較的小範圍を舞台にしたにすぎないこと、また黄帝が北方の狄人種であることや、黄帝以後において南方の苗人種と抗争を続けた歴史を素描し、多民族史として中国上古史を再解釈する可能性を提示している。久米は後にラクペリーの「西來說」に触れたのが前掲注22訳文であったと回顧しており、彼の「支那の起り及人種の変遷」は、ラクペリーの「西來說」の影響ではなく、自らの実証主義史学の中国史への応用として現れた独自の学説として評価されよう（久米邦武「支那の起り及人種の変遷」〔明治廿五年一月十七日講演〕、『史学会雑誌』二八・二九、大成館（東京）、一八九二年。「久米事件」については、田中彰「久米邦武」、『二十世紀の歴史家たち』二）刀水書房（東京）、一九九九年参照）。
- (25) 戸水寛人「支那人種」一九〇三年三月（『温故録』有斐閣書房〔東京〕、一九〇三年五月所収）。
- (26) トウラン主義については、永田雄三「トルコにおける『公定歴史学』の成立」『植民地主義と歴史学』刀水書房（東京）、二〇〇四年参照。
- (27) 今日の長江文明論と重なって見えるこの議論であるが、実はこれ以後も、近年に至るまで、長江が黄河より文明起源が先行したという議論は、中国や日本で繰り返し現れては消えている。前掲注20拙稿参照。
- (28) 秋臯（田能村）「更に同時代の法典あり」『明治法学』五八、明治法学会（東京）、一九〇三年、および田能村梅士「舜帝の刑法に於

- ける刑の発達』『明治法学』六二、一九〇三年。田能村その人については、中島三知子「田能村梅士考」『法学政治学論究』六一、慶應義塾大学大学院法学研究科（東京、二〇〇四年参照）。
- (29) 高橋順次郎「歴史以前の印度支那人種及其の大初同住の根源地」『史学雑誌』九一二、一八九八年。
- (30) 雲藤義道「高橋順次郎」『東洋学の系譜』大修館書店（東京）、一九九二年。
- (31) 「南来」に関する近代東洋学の議論については、前掲注20拙稿参照。
- (32) 前掲注13 Lacouperie, Fernan de, *Fornosa Notes* および *The Languages of China before the Chinese* 参照。
- (33) 鳥居龍蔵「人類学上取調報告」『官報』五九四九、印刷局（東京）一九〇三年五月五日（『鳥居龍蔵全集』以下『鳥居全集』）十、朝日新聞社（東京）、一九七六年）、『人類学上より見たる西南支那』富山房（東京）、一九二六年（『鳥居全集』十に再収録）、および『ある老学徒の手記』朝日新聞社、一九五三年。
- (34) 以上に関連する議論については、田畑久夫『鳥居龍蔵のみた日本』古今書院（東京）、二〇〇七年、拙稿「北方と南方」、『北大文学研究科公開シンポジウム「北的——北方研究の構築と展開」報告書』同研究科（札幌）、二〇〇七年、および前掲注20拙稿参照。
- (35) 鳥居編輯・坪井正五郎校閲『人種誌』高山房（東京）、一九〇二年。鳥居が遅い時期まで漢族西来説の強い影響をとどめていたことについては、鳥居龍蔵「結論」『考古学民族学研究・千島アイヌ』（東京帝国大学理科大学紀要四二一）一九一九年（『鳥居全集』五に再収録）などに関連する議論を参照。一九〇二年の段階では桑原と同様に中央アジア（崑崙）起源説をとっていた鳥居は、大正期以後の著作ではラクペリーの西来説を参照。一九〇二年の段階では桑原と同様に中央アジア（崑崙）起源説をとっていた鳥居は、大正期来説」への支持は同時代の日本の東洋学者の中で他には見られない独特な態度である。
- (36) 鳥居龍蔵「苗族調査報告」（人類学教室研究報告二）東京帝国大学、一九〇七年（『鳥居全集』十一に再収録）。
- (37) 前掲注33『人類学上より見たる西南支那』参照。
- (38) 前掲注20拙稿。
- (39) 筆者未見。宮崎市定「解説」『桑原全集』四、一九六八年参照。
- (40) 桑原の「南北支那論」については、前掲注20拙稿参照。
- (41) 拙稿「近代中国と東亜考古学」『帝国』日本の学知』三、岩波書店、二〇〇六年。

(42) 内藤虎次郎(湖南)『支那上古史』(一九二一・二二年京都帝国大学文学部講義)弘文堂(東京)、一九四四年ほか参照。

(43) 中央アジア起源的な「西來說」の流行には、本文中でも言及したトゥラン主義の影響に加え、スタイン(Marc Aurel Stein)らによって、十九世紀末から二十世紀初めにかけて当該地域で相次いで発見されたさまざまな学術的知見が果たした役割が大きいと推測される。中国では、それが西北辺境への経世学的関心や、伝統的な崑崙信仰、およびそれに関わる諸文献の研究成果と結び付いて、ラクペリーの「西來說」から崑崙起源の「西來說」への転換が進むことになった。「西來」起源地の崑崙への移動については、前掲注1 孫江論文参照。

(44) 拙稿「苗族史の近代(続篇)」『北海道大学文学研究科紀要』一・二六、二〇〇八年(予定)。

(補注(本文三八頁)) 本書(桑原『中等東洋史』)の翌年に桑原の校訂によって刊行された『新編東洋史教科書』(三木書店(大阪)一八九九年)には、「支那は、太古の時代に於て、苗族といへる人種、早く江(長江)河(黄河)の間に居を占めたりしが、今より五千余年前に、漢族、西北方より黄河沿岸に移住し来り、次第に繁殖して、江水(長江)の辺に及び、原住者たりし苗族を南方に逐ひて、其地を領有するに至りき」とある。苗族の居住地を黄河以南としているのは、前掲藤田『中等教科東洋史』と共通する点である。